

日本英語教育史学会 会報

305

2021 年 10 月 11 日

HiSELT *Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan*

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 田邊祐司)

 事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562
 県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
 tel: 0824-74-1727 fax: 0824-74-0191
 e-mail: membership@hiset.jp

 会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)
 ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
 ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第284回研究例会報告

2021 (令和3) 年 9 月 18 日 (土), 第 284 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 39 名でした。

例会では講演と研究発表が行われました。最初の講演では、田邊祐司氏 (専修大学) が「回想 英語名人 河上道生先生のこと」というタイトルでお話しされました。続いて久保野りえ氏 (都留文科大学) による「英語教授研究所ニュースレターから H. E. Palmer の現代性を読み解く」の発表が行われました。司会は馬本勉氏 (県立広島大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は田邊氏, ②は久保野氏の発表への感想, ③は会全体に対する感想です)。

<発表 1 の感想>

◆河上道生先生と親しく交わられたその思い出をうかがい、河上先生の場合は、実力が自信を支え、その自信がさらに実力を伸ばすことにつながるといった相乗作用の好例であると思いました。生前にインタビューをされて MD に残しておられるということですので、豊浦中学校から広島高師・文理大でどのように英語を学ばれたか、さらにその後、英語・英語文化にいかに対峙されたかについて、その学習ストラテジーなどを明らかにしていただければと願っております。また、「東の國弘正雄、西の河上道生」とのご紹介がありましたが、英語界はともかく、一般社会においては國弘先生に対して河上先生の知名度は今一つかと思われまので、ぜひもっと光を当ていただければと願っております。(Dragon)

◆河上道生は、その多くの著作を通じて名前はよく存じ上げていました。クエスチョン・ボックスを通じてお世話になっておりましたが、特に『英語参考書の誤りをその原因をつく』は衝撃を受けたといってもいい出会いでした。今回の発表でいかに先生が英語の勉強をされたかにも胸を打たれるものがあり、語学の習得に王道はないと改めて感じました。浅学非才の自分には雲の上の人のような存在ですが、最近はやりの手軽な英語習得法といった本や意見がいかにかげんなものを痛感させられました。

先生と岡山県との関係で言えば、「岡山県中学校・高等学校英語教育史年表」によると、私の住む倉敷市の川崎医科大学におられた時に、昭和 48 年 (1973) 6 月 22 日に岡山県高等学校教育研究会英語部会研究大会 (於岡山大安寺高等学校) において「高校英語と英語の語法」の演題で講演されております。同年の同研究部会の部会報に「英語を話すことについて」と寄稿されております。

す。また、広島女子大学におられた時、平成5年(1993)6月16日に同上の研究部会(於倉敷南高等学校)において、「国際化と学校英語」の演題で講演されております。(JH4DGW)

◆いわゆる「英語名人」と呼ばれる方の学習歴や学習観を知れる素晴らしい機会となりました。溢れ出る知識欲から生じる圧倒的なインプットに加え、それをアウトプットにまで繋げていた点が、河上先生の類稀なる英語力に繋がったのだと思いました。長期の留学歴などがない中における努力の賜物であるという点は、留学を経験していない現代の学生の励みにもなるのかもしれませんが。(ボレポレ)

◆田邊祐司先生のお話は、とても興味深く聞かせていただきました。私が、北九州大学(現北九州市立大学)に在学している時にも、河上道生先生のお話はよく聞かされていたので、今回このような形でなんとなく再会できたみたいで大変嬉しく思いました。簡単すぎる感想で申し訳ありません。(中村隆秀)

◆田邊先生の河上道生先生に関してのご発表では、河上先生のご経歴から英語の学び方を知ることができました。河上先生の英語への熱い想いや知識欲はどこから来ていたのか非常に気になりました。これまでの自分の英語への向き合い方を反省するとともに、今後英語学習にどのように取り組んでいくかをしっかりと考えていかなければならないと強く思いました。(SU 夏美)

◆河上先生がどのような方であり、どのように英語と関わられていたのか知ることができました。特に学習の動機は興味深いと感じました。改めて語学学習には積極的な姿勢が大切であると認識することができました。(SU 宥翔)

◆英語を勉強していて、「わからないことは徹底的に調べる」ということは、当たり前のものであってもそれを実践するのはなかなか難しいことだなと感じています。その努力を惜しまなかったからこそここまで英語を極めることができたんだと感じました。また、中学生の頃から少しでも多くの時間を英語学習に当てようとしていたことに驚きました。私にももっと有効的に使うことのできる時間がたくさんあるのではないかと考えさせられました。英語学習において、理解するだけでなく、実践をして使ってみるということがいかに大切かがとてもよくわかりました。(SU 遥)

◆以前から英語の名人として田邊先生に取り上げられていた河上道生先生をより詳しく知ることができました。分からないことを徹底的に調べること、精読と多読、日英間の往復作業が大切であると改めて気付かされました。(SU 真彩)

◆「一つのことを表現するのにも複数の言い方がある。数学と違って答えは一つではない。無数の可能性。」というのは英語の面白さを分かりやすく表しているなと思いました。私は、大学受験の勉強をしていたときは一つの正しい答えを追い求めていましたが、大学に入学してからは答えが一つではないのが普通だということを実感しています。また、GRIT理論というのは初めて聞いたので新しいことを知ることが出来て良かったです。(SU 果奈)

◆河上先生についてのお話は、大学でも何度かお話をさせていただいた事がありました。田邊先生が、先生とつけて呼ばれる方は本当に限られた方しかいらっしやらないというのを聞いていました。今日の先生のご講演を聞き、改めて河上先生の偉大さを知ることが出来たと思います。これから、私たち学生が勉強するモチベーションになるご公演だったと思います。雲の上の存在ではありますが、河上先生や、田邊先生を目標として、これからも日々精進していきたいと思いました。(Dai)

◆第284回研究例会に参加させていただきました。今回で学会に参加させていただくのは3回目になります。正直なところこれまで拝聴させていただいたご発表は知識が乏しい私には少々難しく

理解がしにくいことが多かったのですが、今回の田邊先生の河上道生先生についての講演はこれからの英語学習においてとても参考になるものばかりでした。特に私は語彙学習をする際に意味だけを知って満足していたので、どの状況に当てはまるのかなどをしっかりと考慮しながら語彙や表現をものにしていった河上先生の姿勢を見習い、自分の分からないものは徹底的に調べあげる習慣を自分の学習にも是非取り入れたいと感じました。(SU 亮平)

◆河上道生さんに関しての内容で、特に英語の学び方に関する部分は興味深かったです。前期に田邊先生の授業を受けた際に、取り扱ったものも複数あったため、思い出しながら講義を聞かせていただきました。今後、この方法で学びを少しでも深めて、また田邊先生からも学んでいきたいと思えます。(Kent)

◆分からないことを自分で徹底的に突き止めるという、学習に対する価値観を模倣したいと思いました。また、英語は学校で習うものが全てではないが、その基礎的な部分を怠ってはならないという言葉に、はっとさせられる部分があり、今後の学習として素地を大切に、応用学習に力を入れていきたいと思いました。また、質問回答であったような、視覚型の英語ができて、英語ができるとは言えないというのは、本当にその通りだと思えました。私たちは、中等、高等教育を受けてきて、読み書きという点に焦点を置いた学習はしてきているが、聴覚型という点では学習量が足りていないように感じます。総合的な英語力を付けるために、4技能のどこかに偏らない学習を心がけて行きたいと感じました。(SU 祐馬)

◆今回の講義の中で特に心に残った河上先生の言葉が、「功をあせらず、学校の英語で着実に基礎をつくるのが成功への道である。」という部分です。英語だけでなく、スポーツや料理など、どんなことにおいても基礎は重要だと思えます。そこに努力を加えることで、なりたい自分へと成長することができるかと再確認することが出来ました。改めて自分の心に火がついた瞬間でした。ありがとうございました。(SU 羽琉花)

◆いつものゼミとは少し違う雰囲気では田邊先生のご講演が聞けて、大変貴重な時間を過ごすことができました。短時間ではありましたが、河上先生の魅力を感じ、実際に会ってお話を聞いてみたかったなと思えました。また河上先生のような方々を知ることは、これから英語教員になる人にも活力になるとおっしゃっていて、実際に夏休み中で怠っていた自分に喝が入りました。(MGU 遥花)

◆田邊先生については現在大学の授業を履修していますが、改めてとても興味深い内容でした。英語の学習の仕方や、音読の大切さを実感しました。(MGU 瑞帆)

<発表2の感想>

◆今や英国にても応用言語学の分野におけるパイオニアの一人と評価されるパーマーですが、かつてはその評価が来日前3部作によって下されていたところ、IRET Bulletin が復刻され、選集が刊行されるに及んでようやくパーマーがその全貌において理解されるようになってきたことは何よりと思ひながら、本日のご発表を伺いました。その経歴上、主たる活躍の場であった日本においてパーマーがいかなる主張を展開したかについては、特に初期のものは、突然に案出されたものではないので、やはり来日前3部作を読み込んで、その流れの上に Bulletin における主張の展開を追跡していただくことで、ご発表の主眼目であった「現代性」が明確に浮かび上がってこようかと思ひます。パーマー滞日中に発行された号に限定しても相当な分量になる Bulletin ですが、それが完全復刻されて—復刻版第7巻に漏れている付録も少しあるようですが—、すべて読むことができますので、パーマーの全体像をおさえたいうえ、その現代性を抽出していただければと期待いたし

ております。(Dragon)

◆パーマーについては英語教育史では余りにも有名ではあるが、私の中学校現場での印象ではあまり取り入れられていない感じで、学生時代から教師としての駆け出し時代はフリーズの方がよく知られていたように感じている。自分自身もオーラルアプローチの手法を授業でよく使った。その一つの理由はパンプラクティスという手法が取り入れやすかったのだと思う。パーマーはいま一つなじみにくかった。その意味でコミュニケーション重視の現在、オーラルメソッドの有用さを具体的に示していただければと思います。(JH4DGW)

◆パーマー自身の言葉において「One of the saddest things は使わない表現を学生が一生懸命覚えていることだ。」と述べていて、その点が後の語彙研究にも繋がっているのではないかとの解釈を聞いた時、パーマーの「人間味」を感じ取ることができました。単なる学習の効率性といった話ではなく、語彙をしっかりと習得させたいという熱意がパーマーにはあったのかもしれませんが。そのれを踏まえ、一次資料が伝える情報量の多さに改めて気付かされました。(ポレポレ)

◆久保野先生のご発表では、複数の資料から、当時パーマーがどのような言葉で新教授法を説いたのかということを読み解いていきました。大学でパーマーのことを学びましたが、実際にどのような言葉で言っていたのかを見たことがなかったため、新しい発見になりました。(SU 夏美)

◆様々な号を通して Palmer の考えに触れることができました。伝聞で理解にずれが生じてしまうことは恐ろしいと思いました。そのためにも Palmer が用いた言葉を直に考える学問があるのだと思いました。(SU 宥翔)

◆「昔の人は海外の方と話す機会はほとんどなかった」というお話を聞き、外国人の先生の授業を毎週授受け、自分の行動次第でいつでも簡単にさまざまな国の方々と会話することができる今の私たちがいかに恵まれているかよくわかりました。また、100 年も前からパーマーは英語が話せるようになるのに大切なのは「読むことだ」、会話よりも文法の方がずっと大事だなどのように言い続けていたことにまず本当に驚きました。またさらにそれを聞き、今私たちが学習している文法やリーディングの練習がいかに大切であるかを再確認することができました。(SU 遥)

◆あまりパーマーさんの事に触れることはなかったのですが、英語教育を自分自身の日本語学習の経験も含め考えられていたのですね。私自身も fusion ではなく identify で止まってしまうので口頭での英語をより大切にしたいです。(SU 真彩)

◆「英語で考えることから始まる」というのは今までの私の考えをひっくり返すようなものでした。英語を極めた先に物事を英語で考えるということが出来るようになるのだと思っていました。また、「スピーチとスピーキングは違う」ということも今までなんとなく同じようなものだと思っていたので新しい気づきでした。(SU 果奈)

◆これからの私たちの学習にとっても参考になるお話を聞くことが出来たと思います。夏休み中には、田邊先生から声に出して読む課題をいくつか出していただきました。声に出して読むことの大切さを感じている中での、ご発表内容でしたのでとても感心しながら聞かせていただきました。Speech habits を身に付け、これからの学習をより効果的に進めていきたいと思います。(Dai)

◆田邊先生の講義内容に絡む内容もあったので、田邊先生の発表と絡めながら聞かせていただきました。恥ずかしながら、パーマーという人が「英語の授業を英語で行う」ということのきっかけを作った人物の一人だということを知りました。今講義ではパーマーという人物の発言から英

語教育の考察をされていましたが、学生がどこまで学べば、またどのようなことを学べばよいのかということは、とても難しい問いであると感じます。(Kent)

◆口で即座に言えるようになって、はじめて役に立つという考え方に学びがありました。確かに、自分が読んで理解できたり、単語を見て意味を言えたとしても、その単語を自分の言葉として発せないうちは、まだ習得したとは言えないということを改めて考えました。自分の学習においても、まだ使える段階に至っていないにも関わらず、習得したと思い込んでしまっている語彙などもあるので、習得とはどの段階のことを指すのか改めて考えたいと思いました。またパーマーさんは教育者であり、学習者でもあったという点から、同じ学習者としても信頼でき、参考にできる部分を積極的に自分のものにしていきたいと思いました。パーマーさんの学習メソッドをぜひ参考にし、自分でもパーマーさんについて調べ、もっと自分の語学学習に活かせる部分などを発見できたらと思いました。(SU 祐馬)

◆丁寧な解説を交えた講義で、とても興味深く感じました。恥ずかしながら、私はパーマーさんのことを知りませんでした。しかしこれを機に、パーマーさんのことをもっと知りたいと感じました。(SU 羽琉花)

◆大変貴重なお話をありがとうございました。「ニュースレター」という言葉は私にとっては馴染みのないものでしたが、わかりやすいご説明でパーマーにより興味がわきました。また、英語を英語で教えることの大切さやオーラル・メソッドの利点など、今大学で学んでいることとつながりがあったので、とても共感でき、また参考になりました。(MGU 遥花)

◆久保野先生の発表では、パーマー氏の英語教授法について深く学ぶことができました。学校現場に立つことを志している立場として、常に学校教育における英語のあり方を考えることの大切さを痛感しました。(MGU 瑞帆)

<発表3の感想>

◆ZOOM は、新型コロナ禍の中でよく使用されているようですが、自分自身慣れていないので、何となくおっくうに感じます。使用法の習得が必要なのでしょう。やはり会の雰囲気、緊張感などが感じにくいのは仕方がないことですが、研究例会ができることが大切で、コロナが終息して対面での会ができるまで我慢したいと思います。(JH4DGW)

◆何度も資料をチャットで送って下さったため、途中で抜けてしまった際も安心して資料をダウンロードすることが出来ました。ありがとうございました。(SU 夏美)

◆英語に関する貴重な話を聞くことができました。随時チャットで必要な情報を送っていただいたことで集中して会に参加することができました。ありがとうございました。(SU 宥翔)

◆質疑応答の時間、本当に途切れることなく皆様がさまざまな質問をされていて、またその質問からお話が発展していくのが聞いていてとても楽しかったです。学生だけのプレゼンの場ではなかなかみられない光景でとても新鮮に感じました。(SU 遥)

◆休憩時間を挟むことで無理なく楽しむことが出来ました。また先生方の活発な質疑応答から一般生徒とは異なる方向から物事を考えていたり質問をする様子を見ることが出来ました。(SU 真彩)

◆各先生方の発表や質疑応答、休憩の時間設定もちょうど良いものでした。(SU 果奈)

◆今回、二度目の参加となりました。発表もちょうどよい長さであり、休憩も15分と長めに取っていただいたことで、久保野先生のご発表も集中して聞くことが出来、とてもよかったです。次回も参加させていただきたいと思います。本日は、ありがとうございました。(Dai)

◆今回私は、初めて最初から最後まで参加をさせていただきましたが、貴重なお話を聞かせていただけたと思っております。個人的には、いつも講義でお世話になっている田邊先生の講義を聞くことができ、嬉しく思いました。今後も定期的に参加をさせていただきたいと思っております。ありがとうございました。(Kent)

◆全体として、今回は英語学習のモチベーションになる、有益な研究例会でした。私はまだ意見を述べられるほどの土俵にはいませんが、これからも積極的に例会に参加させていただき、自分の英語学習の参考にしたり、動機付けにしていきたいと思っております。本日は、参加させていただき、ありがとうございました。(SU 祐馬)

◆まずは研究例会に参加させていただき、ありがとうございました。未熟な私にとっては、冒頭の田邊先生のお話から最後の最後まで、全てが新鮮で、多くの学びがありました。今回の研究例会での経験を無駄にせず、今後の自分の学びに役立てていきたいです。また、オンラインによる開催であったため、緊張しすぎず、気軽に講演や発表を聞くことが出来ました。また機会がありましたら、ぜひ参加させて頂きたいです。(SU 羽琉花)

◆前回に引き続き、今回もこのような素晴らしい会に参加させていただきありがとうございました。改めて、先生方の知識量・ディベートに圧倒されました。英語教員を目指す身として、自分の未熟さを痛感し、刺激を受ける良い機会となりました。また、オンラインによる運営に対して、特に不便を感じる事がなかったと思っております。(MGU 遥花)

◆今回で 2 回目の参加でしたが、改めてありがとうございました。大学での学びに生かしていきます。(MGU 瑞帆)

発表を終えて

田邊 祐司 (専修大学)

かつて國弘正雄氏 (1930~2014) が「英語のライバルは？」と尋ねられた際、間髪を容れずに挙げたのが河上道生先生 (1925~2012) でした。講演では、河上先生と通訳・通訳者養成に従事した稀有な個人体験をもとに、いかにしてこの英語名人が自らの英語力を「神の領域」へと高められたのかをお伝えしました。

先生へのインタビューから窺うことができたのは、英語力の基礎は「学校英語」(旧制中学) に培われたということです。ただ、与えられた知識をそのまま授受するのではなく、疑問に感じた文法項目などは納得するまで徹底的に調べ尽くしたとも語っておられました。また、膨大な量の英文を読破することも日課にされたそうです。

しかし先生が他の同級生と大きく違ったのは、「音読」、「日英の往復口頭作文」、「シャドウ会話」や「実地訓練」(通訳、留学) といった英語を使う工夫を採り入れ、「目の英語力」と「耳と口の英語力」を統合されたことでした。すなわち「河上英語」は、今で言う 4 技能統合の結晶だったのです。そうした努力の継続を可能にしたのが、先生の知的好奇心、そして GRIT (やり抜く力) と呼ぶべき資質だったのではなかったかということ述べて講演を締めくくりました。

発表を終えて

久保野 りえ (都留文科大学)

Harold E. Palmer は、日本の英語教育史上の重要な人物であるが、長く英語教師をしてきて、

パーマーのめざした英語授業がいまだに実現していないと思わされることが多い。このたび、学会の「出来文庫」より英語授業研究所の Bulletin 復刻版をお借りすることができ、Bulletin に残る当時のパーマーの言葉を見ることで、現在の英語授業に未だ足りないものを探る一助にしたいと思い、発表させていただいた。

一例を挙げれば、thinking in English は、語彙や文法を習得して最後に達成されるもののように思われがちだが、all upside down. である。deciphering (暗号解読) は reading ではない。外国語を知るということは、突き詰めれば、その言葉とそれが表すものを fusion させる (即座に想起する) ことに尽きる。identification (意味と一致させる) だけでは足りない、などである。Fusion と Identification については、1932 年頃の号に頻繁にパーマーは書いているが、1923 年の Bulletin 第 1 号に、パーマーの主張として紹介されている中に fuse の記述があり、来日当初からその言葉を用いていたことがわかる。また、パーマー自身の日本語学習過程を述べた号では、生成力のあるフレーズを、つらくても、文字で覚えるのではなく、口で言えるようにしなければ使えない、と書かれ学習者としての努力を具体的に感じられた。

Bulletin は国内にとどまらず、世界に送られ、後で河村先生も言葉を添えてくださったように、会員の広がりや世界に及んだ。世界の外国語教育改革の推進役の一つになっていたと思うと感慨深い。

パーマーの提唱した指導法に確立した名称はまだなく、reformed つまり新教授法と言っておくのが良いのであろうが、第 1 号発刊当時、研究所のメンバーが取り上げたテーマの一つに「the Conversational Method の重要性」があった。訳読一辺倒を reform するためのいろいろな試みがあり、その中に the Conversational Method もあったと思われる。後で竹中先生がご指摘くださった通り、パーマーは自分の主張を the Conversational Method と呼んではいなかった。具体的に何を指して the Conversational Method と言うのか定義を調べられていないが、conversation という言葉は、その場によって「英会話」的な意味で使われる時と定型会話で使われるように、英語教授の場での問答の意味で使われる時がある。このテーマのメンバーに問答集 *Thinking in English* を著した Spencer Kennard Jr. の名があるので、すばやい問答を使っての方法ということなのかもしれない。

今後も現在の教室に活かせる考えに光を当てて、実践していきたい。

)) 『日本英語教育史研究』投稿締め切りの延長について

『日本英語教育史研究』投稿の締め切りを 2021 年 9 月 30 日 (木) としておりましたが、このたび、これを 11 月 30 日 (火) に延長することといたしました。みなさまのご投稿をお待ち申し上げます。

なお、『日本英語教育史研究』第 37 号は 2022 年 5 月の刊行を予定しております。

)) この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 285 回研究例会 2021 年 11 月 20 日 (土) オンライン開催
- ◆ 第 286 回研究例会 2022 年 1 月 8 日 (土) オンライン開催
- ◆ 第 287 回研究例会 2022 年 3 月 19 日 (土) オンライン開催

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、の 4 点を明記の上、発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日 (3 月発表希望であれば 12 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

日本英語教育史学会 第 285 回 研究例会

日時：2021 年 11 月 20 日 (土) 14:00~17:00 オンライン開催

*申込方法は学会ウェブサイト内の「オンラインによる研究例会 参加方法」をご参照下さい。

【シリーズ：わたしのしごと】

「戦時下の雑誌『語学教育』を読み解く」

河村 和也 (県立広島大学)

【概要】アジア太平洋戦争下の 1942 (昭和 17) 年 2 月、英語教授研究所は創設以来刊行していた *The Bulletin* を『語学教育』に改題し、翌月には研究所の名称を語学教育研究所と改めている。このことについて、発表者は第 275 回研究例会 (2019 年 1 月・京都) で報告したが、論文のレベルに高めるには至っていない。その一方、発表者は、戦時下に刊行された 18 冊の『語学教育』を読み解き、その内容を同研究所の『語研だより』に紹介する機会を得た。『語学教育』ものがたり」という題で毎月 1 ページの連載を始め、かれこれ 2 年半になる。『語研だより』は会員向けのニューズレターであり多くの方の目に触れることはないが、今回は、この連載の内容をご紹介しますとともに、執筆の裏話をご披露できればと考えている。

研究発表

「日本における英語語彙学習教材変遷史：受験用英単語集確立までの道のり」

熊谷 允岐 (立教大学大学院 [院生])

【概要】本発表は、発表者の博士学位論文 (2021 年 4 月 30 日) における成果の一部である。現代において単語集は、高校生や受験生の中に普及する、英語学習に欠かせない副教材の一つだとも言われる。だが、単語集それ自体は、いわゆる「受験英語」の対策本としてわが国で編纂が始まったわけではない。本発表では、日本でいつ、どのようにして受験との結び付きが強まるに至ったのかについて、単語集の歴史の変遷を辿りながら説明を行う。

参加費： 無料

問合せ： 日本英語教育史学会例会担当 (reikai@hiset.jp)

EDITOR'S BOX 新型コロナウイルスの感染状況が、前号発行時から想像できないくらいに落ち着きました。ただ、次号の発行時にはどうなっているか想像が付きません。一日も早い終息を願うばかりです。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 geppo@hiset.jp)